

「今、私の晴雨計は！」⑭

「日銀マイナス金利考

―ある二人の老エコノミスト― 3

平山征夫

こんな問題意識が高じて数年前から「資本主義論」関係の本を買い集めて読んでいる。「強欲な資本主義」「暴走する資本主義」「資本主義は生きのびるか」「資本主義黒書」「アンチ資本主義宣言」「資本主義は人びとを幸福にできるか」「資本主義後の世界」「グローバル資本主義の危機」など本のタイトル表現も百花繚乱だ。いずれまとめて触れてみたいと思っている。

ここへきて投資信託資産運用の募集停止や国債の引き受けの特別扱い

(半面一定の引き受け義務を負う)の返上などの銀行の動きが出ている。マイナス金利の副作用ともいえる現象だ。

白川総裁が退任するに当たり「金融政策はインフレ抑制には効果があるが、デフレ対策としては効果的ではないことが分かった」と述べたと聞いたがその通りだと思う。それはガルブレイズの「紐のたとえ」が良く説明している。ガルブレイズ曰く「紐を引っ張ると同じように中央銀行の緊縮政策によって銀行貸し出しを絞ることは出来るが、逆に貸し出しを増やそうと思つて紐を押ししても全く効果はない」というのだ。言いて妙である。

何だか大学の授業を聴いているみたいになつてしまつたが、「マイナス

金利考」3まで書いたのは、アベノミクスについて主張している二人の老エコノミストのことに触れたいと思つたからだ。

アベノミクスに関する本を捜しに寄つた書店で伊藤光晴著「アベノミクス批判―四本の矢を折る」(岩波書店)という本を見つけた。早速読んでみるとわが意を得たりという内容だった。より解りやすくいかに無策であるかを論じているが、私よりはるかに明確に「円安・株高もアベノミクスとは無関係」、「黒田氏の異次元の金融緩和以前に東京株式市場には割安感から外人投資の買いが入り相場は回復していたし、円相場についても行き過ぎた円高是正の財務省の介入があつて円安に動いていた」と真つ向否定である。思わず「うー

ん」とうなつてしまつたが、この伊藤光晴氏は私が横浜国大・経済学部時代授業を受けた先生だ。今年八十九歳になる「老エコノミスト」の変わらぬ論理明快な主張に思わず拍手喝采した。

五〇年前、当時伊藤先生は外語大の先生で横国大には非常勤で来ておられた。三年生の木曜日、「二限ぶつ通しで伊藤先生の授業があつた。そのうえ三限が私が所属するゼミの宮崎義一先生、四限が後に神奈川県知事になられた長洲一二先生と豪華キャストが続く。前の二人は当時まだ珍しかった近代経済学の新進気鋭、長洲氏はマルクス経済学の理論家で社会党右派構改革派のブレインと言われていた。こんなすごい授業が受けられるのか、感動し興奮しながら

毎週朝早く大学の坂を上った。それはいまだ学生時代の最も印象深い出来事として残っている。学生時代授業で経済学の基礎を教わった伊藤先生に五十年後にまた教えを頂いた。

文章のタッチは「伊藤節」と言われ、ゼミテンが物まねする位歯切れがよかった講義を充分思い出させてくれた。老エコノミストに僭越ながら尊敬と感謝のメールを送りたい。

もう一人の老エコノミストについても触れよう。宍戸駿太郎氏、九十一歳だ。この三月まで本学の理事を務めておられたが、年三回東京から元気に理事会に参加、来られるとひとしきり私と経済政策論争をする。宍戸先生は経企庁出身で「DEMIOS」という計量モデルの開発に携わられた計量経済学の大家だ。

本県にある国際大学の学長を務められた後、私が設立した新潟県のシンクタンク「北東アジア経済研究所」

の副理事長も務めてくださった。本年三月末の理事として最後の理事会終了された際に宍戸先生は、遠慮気味に私に一冊の著書を差し出された。

私がアベノミクスに批判的なのを知っておられるか、何となく恐る恐るという雰囲気だ。そこには「奇跡を起こせ アベノミクス」とあった。

そう、宍戸先生は我が国におけるリフレ派の急先鋒岩田規久男日銀副総裁に近い存在なのだ。その本には伊藤先生とは逆の論理構成、すなわち国土強靱化政策を着実に実施することで、成長率を高め税収を増やしデフレと財政難を一挙に克服するという奇跡を狙った積極財政投入論だっ

た。

論理の全く異なるがこの二人の老エコノミストから間違いなく元気を頂いた。私などまだ学生みたいなものだ。もっと元気な人もいる。最初から反対の急先鋒であった浜矩子同

志社大大学院教授である。その著書のタイトルはすごい。「さらばアホノミクス」みんなで行こう アホノミクスの向こう側」だ！

もし九〇歳位まで元気で生きたくしても「老エコノミスト」にはなれない私としては、幾つになっても自分の意見を主張できる領域を持っておられるお二人は羨ましい。エコノミストもエコノミスト（？）も無理な私は、これから精進して地球にやさしい「エコロジスト」を目指そうかなど思いついたが・・・。

そんなところへ「イギリスのEU離脱」のニュースが飛び込んできた。そしてあっという間にアベノミクスで稼いだ円安・株高分は殆どすつ飛んでしまった。

(平成二十八年六月三十日)

インタビュー

英国の経済学者ケインズ(1883~1946年)研究の泰斗として知られ、積極的に社会問題への提言を続ける京都大名誉教授の経済学者伊東光晴さん。理論と現実を往還する思索の原点には戦争体験がある。

「宇宙のロマンが社会のロマンに変わったんだ」。自宅の書齋で伊東さんは、2006年に死去した恩師の経済学者都留重人さんから、亡くなる直前に贈られたという河上肇(1879~1946年)の書を眺めながらゆっくりと語り始めた。

27年東京生まれ。中学時代に「キュリー夫人伝」を読み、極微の世界の解明が宇宙発生の謎を解くことにつながる「ロマン」に引かれて、物理学を志した。

だが太平洋戦争の情勢が悪化した44年、徴兵を避け、「生き永らえるために」入学した陸軍経理学校では、下士官に徹底的にしこかれた。「天皇の名においてとにかく殴る。軍と社会の野蛮性を知った」と振り返る。

経済学者 伊東光晴さん



自宅の書齋でインタビューに応じる伊東光晴さん=東京都中野区



東京外語大教授時代の伊東光晴さん=1969年

理論と現実 埋め続け

バブルにいち早く警鐘

返る。疎開先で終戦を迎え、帰郷して都電に乗った。いすのない運転台で、立ちっぱなしの運転士を見て涙が出た。自身も経理学校では、起床から就寝まで座ることが許されないつらい日々を過ごしたからだ。「あの時から、労働者の暮らしを良くしなくて

はという思いがずっとまわっていた。」
 疎開先で終戦を迎え、帰郷して都電に乗った。いすのない運転台で、立ちっぱなしの運転士を見て涙が出た。自身も経理学校では、起床から就寝まで座ることが許されないつらい日々を過ごしたからだ。「あの時から、労働者の暮らしを良くしなくて

的に研究が始まったケインズ経済学に取り組んだ。市場の機能を重視したそれまでの新古典派経済学に対し、ケインズは雇用と物価の安定のため、財政出動など政府が総需要を管理すべきだと説き、その理論は戦後の西側諸国の経済政策を変えていっ

米資本主義の本質を照らす

伊東光晴さんが3月に刊行した新著「ガルフレイス」(岩波新書)は、「ゆたかな社会」なる

の著作で知られる米国の経済学者の生涯と思想をたどり、自身の日米経済の分析を交えながら米国の資本主義社会の本質を浮かび上がらせた。病床の都留重人さんに書くよう勧められた一冊でもある。
 理論ではなく現実即した分

新古典派が復権し、世界的に規制を廃し競争を徹底する流れが強まったが、格差拡大など機能が不全が目立つ今日、見つめ直す価値があると伊東さんは考えは「タメだ」と断る。
 2014年刊行の「アベノミ

理論や学説史の研究から、現状分析に歩を進めたのは、都留さんから「理論と現実の隙を埋め有意なる政策を引き出すのが、経済学者が行うべき仕事だ」と諭されたのが契機だ。国民生活審議会委員などを長年務めながら、成田空港建設や原発などさまざまな社会問題に提言を続けた。
 バブルの最中にいち早くメカニズムと危険性を指摘し、90年代を通じて公共投資による景気

析を向より大切に、市場を最重要視する新古典派経済学への異議申し立てを続け、晩年まで意欲的に執筆を続けたガルフレイスの姿は伊東さんにも重なる。

